

ヴィノクール展概観

小林 潔

0 : はじめに

ロモノソフ名称モスクワ国立大学第一人文棟（文学部）図書館に於いて、本大学教授でもあったヴィノクール（Григорий Осипович Винокур 1896—1947年）関連の展示がなされていた（1999年2月まで）。彼の論文集・書誌と彼に関する8篇の論考の紹介である。

モスクワ大学がこのような展示をその図書館で行った理由は明白である。彼はこの大学が誇る偉大な学者・教師であり、また比較的最近の1996年・1997年は生誕100周年・没後50周年であったからである。では、その偉大はどこにあるのだろうか。モスクワ大学がわざわざ展示した関連論文は何を語っているのだろうか。

本報告では、これら論文の内容概観を発表順に示し筆者のコメントを付すことで、ヴィノクールの生涯と業績の一端を紹介することとしたい。モスクワ大学で顕彰されている学者が示すものは日本の研究者にとっても参考になるであろう。但し、このような展示がなされたからといってモスクワ大学の研究者全てがヴィノクールに心酔しているという訳ではない。評価し尊敬はするが崇拜はしないという態度であり、それは健全と思われる。

展示されている文献については、筆者による補足と共に最後にまとめた。

1: 論文概要

ツェイトリン「ヴィノクールの言語学の著作と現代言語学」

Цейтлин Р.М. Лингвистические труды Г.О.Винокура и современное языкознание // ВЯ.—1986.—№6.—С.11-22.

著者ツェイトリンはまずヴィノクールの基本方針と主たる活動・関心を述べる。

著者に依れば、ヴィノクールの学問は多様だが、その方法は文献史料分析のフィロロギー的方法である。(言語学と文芸学は)「これら2つの学問は姉妹であり、テキストの解釈を己の課題とする同一の志向的意識の産物なのである」というヴィノクールの言葉をひき、彼自身自らをフィローロクと規定していたことを示す。そして、教育にも熱心であったこと、モスクワ方言委員会とモスクワ言語学サークルの活動が影響を与えたこと、『プーシキン辞典 (Словарь языка Пушкина)』、ウシャコフの辞典編纂に参加したことを伝えている。

著者の捉えるところでは、ヴィノクールの学問の中心にあったのは、ロシア標準語の歴史文体論、言い換えればロシア標準語史である。理論・学問の哲学的基盤を重視したが、学問とは学問を論ずることではなく、史料(資料)を具体的に扱うことである、としていたことも述べられている。その上で、ヴィノクールは歴史文体論を考察しつつ、歴史文体論の特殊性規定のために必要なだけ言語学の一般的問題も扱ったことを指摘する。

ロシア標準語史の具体的現象の分析に関して、ツェイトリンはヴィノクールの戒めを紹介している。即ち、分析に当たって、あれこれの言語事実の機能は、1: 所与の言語事実と常に一致するわけではない起源の観点から、2: 当該言語で同時に作用している現象から分離させて、考察されてはいけないのである。例えば、スラヴァニズムをルシズムと分けて考えてはいけない。

更に語られることは、ヴィノクールは語史を言語体系の連続的な変遷と考えたので、ある体形を解明・記述するだけでなく、先行・後続の体形との関係を規定しなければいけないとしたことである。ここで

言語の通時態が語られるのだが、同時に、現実の言語にあっては共時態・通時態の対立は見せかけに過ぎないと考えていたことも述べられている。

また、ヴィノクールの語形成論に於ける貢献にも触れられている。

ヴィノクールは語彙を体形として捉えた。ツェイトリンは、ヴィノクール以前には「体形としての語彙」なる概念は術語としての意味を持っていなかったと指摘する。著者に依れば、ヴィノクールは言語記号としての語のコンヴェンショナルな性質を無視した主観主義的語彙研究を批判したのである。

ヴィノクールは言語史の分野として音声・形態・記号を分け、各々他の分野なしではその課題に答えられないとした。つまり、それぞれが他のそれぞれのイントロダクションとなる。しかし、このシェーマに現実の言語に存在している全てが含まれているわけではない。言語の「解剖学」とともに言語の「生理学」があるとするのである。ツェイトリンはこの考えを紹介した上で、それは社会言語学の問題意識の中でアクチュアリティを得ていると主張している。

更に著者はヴィノクールの文体論に言及する。以下述べれば、ヴィノクールにとっては、言語学的文体論とは言語の社会史であった。言語史と文化の他領域とを直接に結びつけているからである。それ故にこの学問を「主として言語学のフィロロギー的問題」と名付けたのである。この時、言語の組成の他に言語使用の問題が生じてくる。言語使用の問題こそが文体論の対象となり、言語史に適用されると歴史文体論になるのである。言語学的文体論が研究するのは、使用の集団的諸形式、即ち、客観的に言語なるものを特徴づける言語事実であり、言語の個々の担い手の諸形式を扱うのではない。言語のスタイルと話し手・書き手のスタイルは別のものである。文体論に関してヴィノクールが強調しているのは、言語体系の全分野を研究することである。この点で言語史の、例えば音韻を研究するものとは異なる。そして、スタイルとは言語使用を規定する体形のことである。

ツェイトリンが更に指摘するところでは、ヴィノクールは術語の濫用を戒めロシア標準語史が真の学問となるよう配慮していた。例えば、テキスト研究に於いて様々な内容の史料に認められる言語的差異の全

てが同一の言語体系に属するわけではない。文章語と現用語の差がそうであるし、書き言葉にしてもその中には互いに相関しない要素も含んでいる。これらの特徴は考察から除外されることもあるし、研究対象ともなる。従って、アプローチの仕方次第でテキストは情報の源泉にも研究目的のものにもなる、ということである。著者が例に挙げるのは規範文体論である。これは実用的な言語学の学科であり、社会の言語学的嗜好の歴史を対象とするものであって、この際、時代のある理想に対してその時代のあれこれの作家がどのような関係にあったかを問題とすべきである、という。

続いて「作家の言語」が例に挙がる。ヴィノクールは個人的な言語・個人的なスタイルの概念を提出し、ここで作家から言語へ、言語から作家への道、作家の伝記としての言語研究の道が可能になったことが語られている。そして、ヴィノクールはフォスラー派を言語のコンベンショナルな性格を見逃した主観主義と批判したことが述べられる。

著者が言うところでは、ヴィノクールに依ると、伝記、心理学、文学史、言語学も、結局言語という同一の史料を対象とするのだが、観点が違うのである。

加えてツェイトリンは「作家の言語」と関連する問題をあげる。言語使用の特別な領域として、あるいは特別な機能の言語、芸術としての言語としてヴィノクールは「詩的言語」を規定する。彼は詩的言語の本質を「内的形式」にあると見ていたのだが、これはポテブニャの言うもの（ポテブニャはあらゆる言語を芸術と見なしていた）とは異にする、と言う。

ヴィノクールのロシア標準語文体論研究は手本としても受け入れられていることも挙げられている。彼はプーシキンの言語の研究から始め、そこから 18 世紀と 20 世紀に広げていった。他の研究についてもツェイトリンは語っており、舞台での発音の研究、晩年の 19 世紀詩的言語の研究への着手が紹介されている。

ヴィノクールによるロシア標準語通史『ロシア語 歴史概説 (Русский язык: Исторический очерк)』（1945 年）についてツェイトリンの語ることは、これは一種の読み物として意図されたものだが学術的な物としても受け入れられたこと、ヴィノクールがモノグラフを書か

なかった 11 世紀から 17 世紀までに関して彼の考えを示すものとなっていることである。著者が見るところ、この書では標準語と文芸の言語との相関の問題が扱われている。

最後に著者は、ヴィノクールのアルヒーフには未完の研究が多く残されていること、完成されなかったのは急死によることを述べる。そして、ヴィノクールが残した未来へのプランは彼だけの問題ではなく今後の学問の発展を示すものでもある、と締めくくっている。

パペルヌイ「ヴィノクール 学究・人間 縁あつての回想」

Паперный З.С. Г.О. Винокур ученый и человек: Воспоминания не по случаю // Русская речь— 1987.—№6.—С.63-67.

回想記事。若き日の著者とヴィノクールとの思い出。

ヴィノクールと初めて面談した日のこと、ヴィノクールの言葉遣い、彼にロシア語を直されたことなどが語られる。ヴィノクールの学生との接し方を著者は「私と君は、学問の諸問題に取り組んでいる二人の人間だ。その他の全ては些事だ」と定式化する。このような態度はヴィノクールと同時代の学者に共通するものであり、再び定式化して「ヴィノクール [……] にあつては民主的な性質が血の中に流れていた。彼等は、年齢・知識の点で若輩の者達に楽観的な信頼、おのが若い同僚に自信を持たせるに預かって力ある敬意をもって接した。私と君は若輩者で、学問の前では神の前でと同じように平等なのだ」とする。

ヴィノクールの講義は優れたもので、これは単に講義技術の問題ではなく内部からの魅力であつたとしている。

またヴィノクールのお気に入りの言葉として筆者があげるのが「総体性 (целокупность)」である。「語を、関わりを無視して判断してはいけない、言語体系の中で捉えずに判断してはならない」と常に語っていたと言う。

パペルヌイに依れば、ヴィノクールの主要な対象はプーシキンとマヤコフスキーであり、前者は新しいノルマを樹立した者として、後者は「反ノルマ」を堅持した者として評価した。二人が基準だったわけである。1943 年に彼のマヤコフスキー論が出版された。著者の見ると

ころ、マヤコフスキーを論ずる際この本を無視することは不可能である。しかし、この著作に依りながらヴィノクールの名をあげないマヤコフスキー研究も存在することが指摘されている。

最後に著者は、学生団体での活動の思い出として、議長を務めていたヴィノクールに学生達の手紙を書いたエピソードを紹介している。ヴィノクールは不当な非難、運命の変転を被ったが、「しかし彼は、同僚や弟子、彼に近しくまた彼を必要としていた全ての人の愛を感じていた」と締めくくる。

シャピル『『詩歌の文法』とその造り手達（ヴィノクールとヤコブソンに於ける『詩的言語』理論）』

Шапир М.И. «Грамматики поэзии» и ее создатели (Теория «поэтического языка» у Г.О. Винокура и Р.О. Якобсона) // Известия АН СССР, Серия литературы и языка—1987.—Т.46, №3.—С.221-286.

4 部構成の論文。

第 1 部で、著者はまず「詩歌の文法」なる公式がヤコブソンの著作以降認知されたことを述べる。その際、ヤコブソンまで半世紀の歴史があったこと、ブスラーエフやポテブニャの学統があったこと、そしてオポヤズ（詩的言語理論研究会）やモスクワ言語学サークル、プラハ言語学サークルの活動と関連していたことを語る。しかし、この用語は実は既にヴィノクールが 1945 年に使用していたことを指摘する。

第 2 部冒頭でシャピルは、ヴィノクールとヤコブソンの「詩歌の文法」の比較をすると両者は近い、と主張する。その上で、ヤクビンスキーからモスクワ言語学サークル、オポヤズ、プラハ派の研究史をたどる。そこでは詩学上の「機能」が問題とされるわけだが、ヴィノクールについては「詩的機能は語を通じて、語そのものとは一体何かを我々に示し、一方で語のその他の機能を通じて、我々はその他の対象を識別する」との言葉をひく。この他、ヤルホやクローチェ派、プラハ派のテーゼにも触れる。

そして、ヴィノクールとヤコブソンの関心をひいたものは「内的形式」であったということが示される。これはフンボルトに始まり、ポ

テブニャ、シュペート、フロレンスキーにいたるものである。「内的形式」はヴィノクールにとって包括的な意味を有していたとされる。ヴィノクールが「内的形式」の分析欠如故の誤りとしてトィニャーノフ、ラーリンを批判していることが挙げられ、結局、オポヤズとヴィノクール・ヤコブソンは異なっていたことが語られる。

第 3 部では、社会文化的な問題と専門的な言語学の問題の接点にあるのが「詩歌の文法」の問題だという主張のもと、フォルマリスト達の研究からシュペート、バフチンらの研究へと向かう流れがたどられる。ここではセミオチカとセマンチカの違いが語られるが、芸術形式のセマンチカの研究がヴィノクールとヤコブソンの後期の研究で継続されたとされる。例となるのが 1944 年にヴィノクールが取り組んでいた論文「バラティンスキーの叙情詩に於ける『我』と『汝』 (Я и ты в лирике Баратынского (Из этюдов о русском поэтическом языке))」である。また詩歌の格と韻の問題について研究史がたどられている。

第 4 部ではまず、ヴィノクールとヤコブソンの研究には一致点があることが主張される。シャピルに依れば、これは両者が 10-30 年代のフィロロギーの成果から離れて同様の理論的結論に達したということで、個々の不一致はヤコブソンの仕事がより後期の 70-80 年代の理念を反映しているからであると言う。この上で著者は、クーンやポパーをひきつつ、学術の発展を考えようとする。

著者は 3 つの立場を挙げる。ヴィノクールは、文体論の諸事実のうち、集団的なものだけを言語学の対象とし、作家の個人的なスタイルは文学史の対象とみなした。ヤコブソンの方は、詩学を全て言語学とみなした。またヴィノグラードフの見解は中間的で、文芸作品の言語研究というのは言語学にも文芸学にも近く、同時にどちらとも異なるとした。これら 3 つからの唯一の出口がヤコブソンによって提出されたのであるとし、シャピルはこう述べている。「『詩的言語』の領域が全く異なる学科にとって共通であるならば、即ち、それぞれの間の境界、殊に言語学と文芸学との間の境界は、研究される現象の性質の中にあるのではなく、現象を反映させる学問の性格の中、学問の固有の限界のうちにあるのである。この限界は、知の様々な領域の対象と方法の総合によって克服されるはずである。」

著者が更に問題としているのが研究の目的と方向である。意味から言語へか言語から意味へか、連続から離散へか離散から連続へか、全体から部分へか部分から全体へかということである。意味が連続的で記号が離散的ならば、記号を分析することで形式が、形式を綜合することで意味が得られる。ある場合には、内容が所与で言語（形式）記述が目的であり、別の場合には出発点が形式（言語）でその研究が美的内容の把握へと至る。第1の方向がフォルマリズムであり、第2が構造主義である、というのが著者シャピルの見解である。

こうしたことに関して、シャピルはレフォルマツキー、トゥルベツコイ、ヴィノグラードフといった諸家の例を挙げる。

著者の見るところ、ヤコブソンは、文法的構造から出発し、その後、意味的全体に移る。しかも具体的検討に於いてだけでなく一般概念の方法論的記述に於いても行う。ヴィノクール理論に於ける、部分の構成的連続性は逆である。内的形式としての詩的言語の意味論的規定から語彙・文法・音韻のセマンチカの個別問題に行くのである。

こうした上でシャピルは、「詩歌の文法」に関して、ヴィノクールの理論はフォルマリズムの発展であり、ヤコブソンのそれは構造主義の立場からの伝統との断絶と再考とみなせないか、との問題を提示する。著者は性急な回答を避けているが、ヴィノクールの構造主義への接近について言葉を費やしている。

あらゆる言語は詩的言語であるとするポテブニャ説やフォルマリスト達の詩的言語と実用の言語との厳密な区分けに代わって、1つの言語の様々な機能という構造主義理論が生じたわけだが、ヴィノクールとヤコブソンの「詩歌の文法」は発展的新テーゼの見本であり、新しいテーゼへの転換を示している、それを前進させるのが我々の課題、というのが結論である。

タタリノフ「ヴィノクールとレフォルマツキーの術語論見解」

Татаринов В.А. Терминологические возрения Г.О. Винокура и А.А. Реформатского// Филологические науки—1992.—№5-6.—С.63-75.

この論文では、ヴィノクールとレフォルマツキーが術語論の古典で

あることがまず指摘される。ヴィノクールはロシア語学、詩学研究以外に、術語委員会で積極的に活動していた。術語の標準化に関わり、1933年には工学用語会で講演していたことが示されている。この報告が、ヴィノクールを術語論の古典の地位におく1939年の論文「ロシア語工学用語に於ける語形成の諸現象について (О некоторых явлениях словообразования в русской технической терминологии)」の基になっている、との主張である。

タタリノフが述べるところでは、ヴィノクールが課題としていたのは、科学哲学の代表者とロシアの哲学者 (J.S.ミル、フッサール、シュペート、ポテブニャなど) の関心の中心にあり、その方法論的装置が公的なイデオロギーと哲学によって敬遠されていた術語論の問題を学会の話題とするというものであった。著者はヴィノクール論文の社会背景を述べ、ヴィノクールの論にはシュペートの影響が見受けられることを指摘している。著者に依れば、ヴィノクールは39年の論文を最後に術語論から手を引いているのだが、彼の論文は術語論という新しい学問領域への道程に於ける独自の歴史的段階なのである。更にタタリノフは、ヴィノクール論文に関して「主たる学術的損失は、論文が『引用されるもの』となってしまう『読まれる』ものではないことだ」としている。

本論文では、その後、レフォルマツキーの術語論の概略と歴史、レフォルマツキーによるヴィノクール批判が語られている。

シャンスキー「ヴィノクール(生誕100周年に寄せて)」

Шанский Н.М. Григорий Осипович Винокур (к 100-ю со дня рождения)//Русский язык в школе—1996.—№6.—С.97-101.

シャンスキーはまず、ヴィノクール以後もロシア語学は発展しているが、彼の著作は依然として価値を有していると述べる。ヴィノクールの学問の特徴としては「彼にとっては言語学と文芸学は分かれていなかった」とする。どちらもロシア語研究として統合されていたとするのである。そして、「彼の多くの研究は今日も尚アクチュアリティと学問的意義を失っていない」とする。

続いてヴィノクルの伝記の概略を述べ、ウシャコフをはじめとする彼の教師達や主要活動をあげる。特に彼の死後完成した『プーシキン辞典』に触れる。

言語学に関しては、ヴィノクルは多方面に関心を持っていたとされる。幾つかの分野で彼はパイオニアであり、例えば今日「言語のエコロジー」と呼ばれるものの創始者であること、「ロシア標準語史」という領域を初めて作ったことが語られている。

著者に依れば、ヴィノクルは自分を社会への応用を無視した言語学者とは考えていなかった。複雑な事象も可能な限り単純に説き、言語使用の実際と日常生活へ通じていなければいけないと考えていた、とのことである。それ故に、『プーシキン辞典』やウシャコフとの辞典作成に関わり、プーシキン全集の編纂、標準語史講座の開設、正しく純粋なるロシア語の擁護に与したとされるのである。

このようなヴィノクル観は既に語られていることであるが、著者はヴィノクルの著作の幾つかを取り上げ、それに補足を行おうとする。

第 1 に挙げられるのは『ロシア語 歴史概説』(1945 年)である。ここからロシア語標準語史という科目が育ったとしている。

続いて「ロシア語語形成覚え書き (Заметки по русскому словообразованию)」(1946 年)が言及される。著者は、この「覚え書き」がロシア語における形態素論と語の構造研究の源であるとする。この論考は著者も参加していた語形成セミナーの学生にとって「山上の垂訓」として受け入れられたという。ヴィノクル自身は 1943-44 年のセミナーでの学生との共同作業の成果であると語っていたそうだが、シャンスキーは勿論内容の殆どがヴィノクルに由来するとしている。尚、同テーマの論考でヴィノクルの死後 1959 年に刊行された「ロシア語に於ける語の形態と品詞 (Форма слова и части речи в русском языке)」は、ヴィノクル自身過去の物と見なし、シャンスキーにはその旨強調していたということである。著者は後者の刊行が注釈抜きで行われてしまったことを嘆き、形態素論と派生研究に悪影響を及ぼしてしまったとしている。

第 3 にあげられるのは 1942 年の『プーシキンとロシア (Пушкин и

Россия)』である。プーシキンの愛国心の問題とロシアに於ける意義を扱った本著作は、当時も現代も古びていないとされる。

第4は1947年の「現代ロシア標準語に於けるスラヴァニズムについて (О славянизмах в современном русском литературном языке)」である。

第5は1943年の『マヤコフスキー 言語の改革者 (Маяковский — новатор языка)』である。これはロシアの詩的言語の研究に於ける重要な発展契機となったものとされており、これが「詩歌の文法」研究、文芸作品の言語事象の徹底かつ完全な記述と全般に渡る分析を促進したとしている。シャンスキーの考えでは、ヴィノクールのこれ以前の論考『『ボリス・ゴドゥノフ』の言語 (Язык «Бориса Годунова»)』(1936年)、「プーシキンの詩的言語に於ける18世紀の遺産 (Наследство XVIII века в стихотворном языке Пушкина)」(1941年)などがこの著作に繋がったという。

以上の例をあげた上で「ヴィノクールはその論考によって疑いもなくロシアのロシア語学に消えることのない足跡を残したのである」と著者シャンスキーはまとめる。

以上のように学者としてのヴィノクールについて語った後、著者は人間としてのヴィノクールに触れる。彼に依れば、両側面は実は共通しているのである。シャンスキーは、彼が出席したヴィノクールの初めての授業の様子、雄弁ではないが記憶に残る透徹した論理的な語り口を述べる。その他、暖かみのある人間で、学生を大事にしたことを語り、その結果、彼の門下から何名もの優れた学者が育ったことをあげている。また、援助や忠告を求める人に対しては誰にでも親切であったとする。その例とされるのが流刑中のヴィノグラードフの帰京嘆願書への署名である。

ヴィノクールは今なお生きている、というのが著者の結びとなっている。

#ギンディン、イワノワ「ヴィノクールとヤコブソンの書簡による論争のエピソード (ヴィノクール100周年に寄せて)」

Гиндин С.И., Иванова Е.А. Эпизод эпистолярной полемики Г.О.Винокура и Р.О.Якобсона (К 100-летию Г.О.Винокура) //Известия

РАН Серия литературы и языка—1996.—Т.55, №6.— С.60—74.

本論は3部に分かたれる。第1部は編者ギンディンによる序論であり、第2部では、ヤコブソン宛ヴィノクール書簡とヴィノクール宛ヤコブソン書簡がそれぞれ1通ずつ活字化されている。第3部はそれら書簡に対する注釈となっている。

序論部ではまず、ヴィノクールとヤコブソン(1896—1982年)の両者はモスクワで親交を結んでおり、ヤコブソンの国外移住後も両者は文通していたことがあげられる。この文通は1920年から29年まで続いており、現在16通の書簡が現存する由。そのうち、編者は論争的性格のものを2通活字化する。編者の意見に依れば、この書簡において「彼等は互いに詳しくまた妥協することなく論争をしている」のである。この論争は1925—27年のものである。

編者は論争のポイントとして、1：詩歌と詩的言語の本質、2：現代芸術の道程、3：言語学の課題・方法論・発展方向、の3点をあげている。それぞれ編者の示すところを述べれば以下の通り。

1：ヴィノクールはシュペートの影響を受けており、「内的形式」の概念をポテブニャ的理解ではなく、詩的体験の根本となる、言語構造の内的分節として復活させることが重要であると考えていた。ヴィノクールはこの概念に基づいてオポヤズの詩的言語の概念を再構築することを提案した。一方、ヤコブソンはこのような変更を受け入れることが出来ず、ヴィノクールについて「シュペート主義とマルクス主義を結合させようと試みている」と語った。

2：未来派と言語学的詩学に対する影響の評価。ここでも両者は意見を異にしており、しかもそれは単なる趣味の相違ではない。初期のヴィノクールは未来派を熱狂的に受け入れ、最初の著作は未来派論でさえあるのだが、後、転向する。ヤコブソンは、言語学的詩学の今後の発展を可能にする唯一の基盤として未来派を見なし続けている。

ヴィノクールの転向は、彼の哲学的美学的学術的見解の内的発展に依るものであるし、20年代ロシア詩学で生じた過程と相関しているのだが、ヤコブソンにとっては、未来派からまっとうな理由で離れると

いう考えそのものが想像も出来ないものだったようである。

3：言語学の課題と発展方向について。ヴィノクールはそもそも己の道を術語の真の意味でのフィロロギーへ向かうものと考えていた。しかし、最後には言語学の課題とフィロロギーの課題を綿密に分けることになる。

このことは、1924—25年に彼がフィロロギー的研究で何を意味していたかを考えさせるのだが、ここでヒントとなるのがヤコブソンとの共通の師であるポルジェジンスキーである。彼の考え方はヴィノクールの41年の「言語史の課題 (О задачах истории языка)」に共通するものである。即ち、諸言語に共通する法則を導くための言語研究、人間の言語一般のある現象としての個別言語理解と、現にあり、かつてあり、生じていた実際の言語（群）の研究である。ヴィノクールにとっては両研究は異なるものであり、前者のみが「言語学」と呼ばれ、後者は「言語史」とされるのであった。そして、言語学をフィロロギーに向かわせるというのは、個別の文化体系に属する個別言語を対象とした言語学研究をするということになる。一方、ヤコブソンの方向は、人間の言語一般の共通法則を立てること、ユニバーサルな方向なのである。

編者の考えでは、ヴィノクールとヤコブソンの書簡は、両者の方法と理念の相違を明らかにしているのである。そして、ヤコブソンが「我々は abc からして異なっている」と述べたこと、ヴィノクールのプラハ訪問もそれを解消することは無かったことが示される。

このような両者の違いはその後にも解消されなかった、というのがギンディンの立場であり、その証拠として、ヤコブソンは20年代の言語学・詩学の運動を回顧する中でヴィノクールには言及していないこと、学問的な面でもヴィノクールの詩学論への言及はないことを挙げている。これらは不一致が最後まで続いたことの証明であろう、とギンディンは考えるのである。

ヤコブソン宛ヴィノクール書簡 モスクワ発 1925年8月18日付 (65—68頁)

ここでヴィノクールはヤコブソンの反論の不当を述べている。そして、オポヤズに関しては「オポヤズの不幸は単に、それが未来派的偏見に束縛されていることで、それら偏見が、対象たる言葉を具体的なまとまりで評価することをオポヤズに許さず、オポヤズの人達をフィロロギーに於ける抽象的自然主義派に留めている」と言う。また、ヤコブソンに呼びかけて「内的形式の研究なしには、言葉の本当の詩的機能には決して到達しないし、詩歌の場所に『魂』などといったものを常に持ち出す妥協主義を克服することは出来ない。そして、オポヤズは詩歌解明に無力なのである」とする。そして、「我々の世代の課題とは、『諸事実を新たに解明する』だけではなくて、新しい言語学理論を打ち出す、新しい『言語学序章』を書くこと」と言う。

自身の立場の変遷に関しては、「間違いも疑いも知らぬ者は幸いである、そういう人は胸が苦しくなるほどうらやましい、しかし、自分は現にあるような人間なのであり、自身の使命と感じることをせざるを得ないのだ」とする。

その他は最近の仕事や家族の様子で、「家庭人と『本の虫』として暮らし、本と家族以外には、興味は多分ない」と述べている。

ヴィノクール宛ヤコブソン書簡 プラハ発 1927年2月5日付(68—69頁)

実務的な手紙。ヴィノクールの『伝記と文化 (Биография и культура)』(1927年)に関して「この点では我々は abc から違っている」とする。但し、直接会って話し合えば共通点が見つかるのではとの希望も表明している。

更に「自分には生理的に、資料で示されない原理的な仕事は如何なるものでも無縁である」とし、ヴィノクールを「君の仕事はあからさまに原理的」と批判する。

注 (69—74頁)

両書簡について 63 の注が付けられている。

#クルィシン「ヴィノクールの著作に於ける言語の社会学の諸問題」

Крысин Л.П. Вопросы социологии языка в работах Г.О. Винокура//

Русский язык в школе—1997.—№2.—С.104-107.

著者クルイシンはまず、ヴィノクール生誕 100 周年・没後 50 周年に触れたあとで、ヴィノクールの業績は今も価値ありとする。その上で、彼の社会学的著作にはあまり関心が持たれていないことを指摘する。その領域でのヴィノクールの言説も当時にあつては新しいものであつたばかりではなく、今日もアクチュアルであるとする。

そこで彼の社会学に関して述べていくわけだが、著者はまず彼の生きた時代に言及している。それは 20 世紀 20 年代 30 年代であつて、革命後に生じた言語変化に強い関心を持っていた研究者の世代にヴィノクールは属していたとする。著者に依れば、ヴィノクールは、言語変化の社会的条件のメカニズムを考察しただけではなく、その条件を実際の言語資料の分析を通して示した点で際だった形象をなしている。

ヴィノクールの主要関心は、クルイシンに依れば、機能的側面、つまり話者が言語を如何に使っているか、ということで、それは現代の術語では実用論であるという。ヴィノクールのこのような関心は特に彼の論集『言語文化 (Культура языка)』(初版 1925 年第 2 版 1929 年)に示されているということである。但し、この論集はトロツキーなどの新聞記事を資料としていたため事実上禁書であつたとのこと。この論集への関心は近年何度か示されたが、著者は、それでもやはり不十分と言う。20 年代初頭にヴィノクールが指摘した口語の特徴は 70 年代にようやく入念に取り組まれることになった。

クルイシンはヴィノクールの社会学的研究の典型例として 1923 年の「詩学・言語学・社会学 (Поэтика. Лингвистика. Социология. (Методологическая справка))」を取り上げる。「この論考は、初期ヴィノクールの学術業績にとつても、言語過程の社会的条件に関する彼の観念にとつても甚だ特徴的」だからである。

まず、ヴィノクールのソシュールへの関心が指摘される。ヴィノクールは恐らく、1922 年にパリで刊行された『一般言語学講義』によってソシュールを知つたとされる。露訳刊行は 33 年であり、20 年代初頭にヴィノクールがソシュールに注目していたことは特筆に値するという。ヴィノクールがソシュールの中で注目していたことは、言語は社

会的現象である、ということで、クルィシンはヴィノクールを引用しそれを示す。つまり、言語を社会的に条件づけられた規範と捉えていた、ということである。しかし、これは既にソシユールではなくむしろコセリウだとの留意は付けている。

ともあれ、社会的に条件づけられた規範としての言語理解はヴィノクールにとって公理であり、「このような公理に依って彼は、抽象としての言語、構造としての言語から、発話、発話行為へと移行したのであり、発話行為は実際、彼の生涯を通じて関心の対象であった」とされる。

著者はヴィノクールの規範解釈の 2 面を紹介する。1 つは「その言語の話者全員にとって共通に義務的である何らかの社会的に条件づけられた規定」であり、他面は「規範に規定された言語手段を用いながら話者は徐々に規範からの『逸脱』を許し、それによって新たな規範を作り出す」というものである。

ソシユールの「ラングとパロール」に関して、クルィシンはヴィノクールの次の言葉を引用している。「言語そのものとパロールとの間の相違は、『言語そのもの』と『スタイル』との相違に他ならない。「スタイル」とは、共通言語規範の社会的且つコミュニケーション上規定された変化・変容の結果であり、発話の目的に対応した言語手段の用い方とされている。そしてヴィノクールによるスチリスチカ（文体論）なる学問領域理解は、「話者による目的に適った言語使用の視角から言語現象を」研究すること、「発話が従う目的に従って個々の発話を」分析することだとする。

クルィシンに依れば、このような理解から発話行為論といったその後の学問との関係が見出せる。しかし、ヴィノクールを発話行為論の源と主張するのは間違いと述べ、彼の考えと現代言語学の幾つかが相応していることに注目することが大事なのだと留意を付けている。

さて、文体論の問題の中でヴィノクールが特に関心を持っていたのは詩的言語であったとされる。「彼は詩学を文体論の一部と理解していた」。

詩的言語に於いては、語は物・対象であり、目的と機能の 2 つのカテゴリーを持つ。機能は美的機能もしくは詩的機能である。

では、語が非社会的かということそうではない。パロールは個々の行

為であるが、そのような行為の幾つかは既に、狭いかも知れないがある社会的な領域での共通・義務的意義を持つ、とされる。

結局、著者の見解では、ヴィノクールによる言語・文体論・詩的言語の理解は社会的なのである。しかし、ヴィノクールが言語学者に社会学者になるように求めていたわけでは決してないことは著者により強調されている。しかもそれは、言語研究の社会学的アプローチに反対していたということではなく、言語理論の粗雑な社会学化や言語分析を俗流社会学的憶説で置き換えてしまうことに反対していた、ということである。つまりは言語学による言語事実の分析がまずあり、それは記述的な研究である、そしてその後、それを説明・解釈するものとして社会学が来るのである。しかも後者は勝手に題材を付け加えたりしてはいけないのである。

クリシンは、このようなヴィノクールの考えは現代から見れば当然のように思われると言い、俗流社会学が隆盛であった時代に語られたものであることを強調している。

最後に補足として、次のように述べている。「過去と現代の間の相応を見出そうとする願いは、両極端を生み出すことがある。一方で、入れ込むあまり、先行者の著作の中に実際には無いものを見出し始める。他方で、現在の知識レベルの観点では当然のことと思われる考えを見逃し易い。それらはそれらが属していた時代の指標に基づいて評価すべきものなのである。」

ギンディン「ヴィノクールの2つの周年の間での思索」

Гиндин С.И. Собирая по крупницам...: Размышления между двумя годовщинами Г.О.Винокура//Литературное обозрение—1997.—№3.—С57-59.

これは没後 50 周年特集「ヴィノクール 1896—1947—1997 年」の序章をなしている。この特集には、ヴィノクールの友人レフォルマツキーの娘による回想記事、シュミットによるプーシキニストとしてのヴィノクール論、オデスキーによるヴィノクールのピョートル期研究の話、モスクワ言語学サークルでの映画論が掲載されている（書誌参

照)。モスクワ大学文学部図書館がなぜ序章部分しか紹介しなかったのか理解に苦しむ。

ギンディンがまず語るのは、1996年はヴィノクルの生誕100周年で、ヤコブソンやヴィノグラードフの100年祭と比べれば控えめだがそれなりに祝われたこと、学術誌や一般紙に回想記事が掲載され、「言語・文化・人文知識」という4日間の学会が開催されたこと、また、彼の『ロシア語 歴史概説』が注釈付きで再刊され、書簡の公開準備も進んでいることである。

1997年は没後50年に当たるが、生誕100周年・没後50年がこのように近い場合両者は普通まとめられがちであるとした上で著者は、しかし、ヴィノクルの場合は異なるとする。彼の遺産は今でもアクチュアリティがあるし、彼の遺産を完全に把握し学史上の位置を考察することが出来ていない、というのが理由である。そこで、だから没後50年を、ヴィノクルの遺産の体系的な把握・習得と彼の創造的道のりの学びの開始段階とすべきである、という主張を行う。まだ総括をすべき段階ではない、最近には新たなヴィノクル論も出、彼の著書も再刊されている、今回はその新資料と新たな研究の提出の一環である、というのがギンディンの立場である。

2：概観を通じて

展示されている論文は多様である。論文の性質上、賞賛記事的性質となっているものの（ヴィノクル批判あるいは批判的継承は個別的な研究課題の考察の中で行われていくはずである）、これはヴィノクルの学問の多面性の反映と言える。

8編の論文は、回想記事、ヴィノクルの学問の全体的な概説と評価（後世への影響）、同時代人との交流を考察した学史的な紹介・考察、個別テーマを扱ったものに分けられる。

そこで浮かび上がるのは、ヴィノクルとは20世紀前半のロシアという特定の社会・文化状況の中に暮らし様々な人々との交流の中で影響を受け、他に影響していった具体的な人間であったということと、

何よりも己の考察によってその存在意義を持ち、各研究者が師表としたり批判対象としたりするところのヴィノクールという名の思想の2つである。前者は、肉体を持ち周囲との関係のうちにあった過去の特定の人間であり、後者は、ヴィノクールという名で示され、現代にとって同時代の存在となっているものである（この場合、思想・概念が重要なのであり、その概念の提出者がヴィノクールでなくても構わない）。クリチェフスキーが語るように「学者の主要な伝記的事実は書物であり、主要な事件は思想である」ゆえ、純粋に学問的な観点から言えば後者のみが重要となる。しかし、如何なる研究者も具体的な歴史的文脈を離れて存在することは出来ない。前者のアスペクトも意義を有するのである。そして、8編の論文は、過去のヴィノクールという存在が同時代的な意味を有していることを示そうとしている。

特定の間人としてのヴィノクールを考えた場合、これら論考を通して分かることは、研究者は広い視野を持ち同時に人間であり教育者であるべき、との一つのアイデアの具現・典型にヴィノクールがなっていることである。このアイデアを論ずる必要はないと思われる。過去は美化され、自分の教師を誇ることは人の常、ということをし差し引いても、典型たるヴィノクールの姿は師表たりうる。

この意味で、具体的な状況下でヴィノクールがどう生きていたか、伝記の記述は単なるエピソード叙述以上のものとなる。それ故、各々の論文に多かれ少なかれ見られる伝記的記述は傾聴に値する。しかし、各論文を見た場合、問題点も感じないわけではない。

ツェイトリン論文はヴィノクールの生涯と業績の総括をしているが、執筆時点から見たまさに総括であり、ギンディンらが触れヴィノクール自身も書簡で述べているヴィノクールの思想的変遷を明示していない（そしてギンディンはまだ総括の時期ではないとしている）。ヴィノクールの現代的意義を考えた場合、どのような変遷をしたかは問題なく、まさしく意義のあるところだけを挙げれば良いのであるが、やはりそれだけでは不十分である。その点、ギンディンやシャピルの論考は対立しつつも、ヴィノクールが周囲とどう関わり誰の影響を受け、思想がどのように変わっていったかに迫ろうとするもので、ツィトリ

ンの補いとなっている。ヴィノクールが周りとの交流の中で生き、悩み、自分の思索を続けていき、変化していったことを示すことは、師表たるヴィノクール像の破壊ではなく、むしろ血の通う生身の人間として師表を提出することにつながっている。

従って、ヴィノクールの書簡を紹介し、真のヴィノクール研究を始めなければいけないと主張するギンディンの活動は今後発展されるべき学史研究である。例えば、ギンディンはシャピルの論考内のある主張を「源泉の不正確な解釈に基づいている」（ギンディン 1996年 62頁）と述べているが、源泉研究を行う立場からの批判として重要である。源泉を研究しつつそれら研究を批判しあうこと、このことによるのみ、生きたヴィノクールを示すことが出来、その像を、欠点も迷いもあったがやはり範とすべき師表として受け入れることが出来るのである。

尚、学史を考える上で、先行者（この場合はヴィノクール）の評価は彼の属していた時代の指標に基づくべきとのクリュシンの指摘は重要であると思われる。

思想としてのヴィノクール、現代になお生きるヴィノクールの意義は、まず現在、ロシアで記念学会が行われ、ヴィノクール論が執筆され、展示がなされたという事実そのものが示している。

以上をふまえ、より具体的・個別的な問題に触れたい。

まず、研究方法に関して。ヤコブソンは、史料（資料）に基づかず「原理的」に著作しているとヴィノクールを批判していた。一方で、ヴィノクールは具体的な史料に基づいて研究したという論者もある。これをどう捉えるかは、第一に各個人による。筆者は、言語のユニバーサルや類型論に踏み込んだヤコブソンに比して、ヴィノクールが何よりもロシア語という具体的な個別言語を扱った点、即ち、ヤコブソンにはならなかった、という点で「資料に基づいていない」という指摘は不適であると考え。しかし、ヴィノクールの著作をひもといた場合、ヤコブソンの批判にも一理あると感じる。確かに具体的な史料、あるいはロシア語という対象を考察しているのだが、あるシェーマを前面に出し、そのシェーマを具体例で解説していく、ということがヴィ

ノクールには見られるのである（例えば 1946 年の「ロシア語語形成覚え書き」や 1941 年の「言語史の課題について」）これは、論文の種類にも依ることであるし、彼の作風の問題でもあるのだが、「原理的」な所があることは確かなことだと思われる。但し、このことは逆にヤコブソンに対しても言えることであろう。

ヤコブソンとヴィノクールに関し、フィロロギーのことを言えば、ヴィノクールが自己を第一にフィローロクと規定していたこと、ヤコブソンが「我は言語学者なり、言語に関わることにて我に関わらざるものなし」と述べていたことは、両者が対立しつつも、共に広い視野の学者として、言語現象を総合的に捉えようとしていたことを示しているように思われる。即ち、敢えて差異を無視して乱暴に言えば、両者は真のフィローロクであった。

勿論、かようなレッテルを貼ることでことたれりとするのは過ちであり、両者を当時の文脈で尚捉える必要があること、両者の方向性の相違・変遷を考えねばならないことは、既に言うまでもなからう。

個別の問題として更に挙げられるのは「詩的言語」関係のことである。これを論ずることは筆者の力量を越えることでもあるので今は措く。

ヴィノクールが「ロシア標準語史」なる学問領域の創始者であることは、既に指摘されていることであり（筆者も 1996 年 10 月に「学問領域としての『ロシア標準語史』—ヴィノクールが示すもの—」との報告を日本ロシア文学会で行った）、シャンスキーもそれを主張している。この主張は間違っていないが、不十分な点がある。筆者がモスクワ大学文学部ロシア語科ガリンスカヤ助教授に尋ねたところでは、当大学のこの領域にヴィノクールの遺産は取り込まれているが、彼のシェーマに従っているわけではない、とのことである。モスクワ大学文学部といったロシアの代表的な教育機関でヴィノクールを既に消化済みとしていることを無視してシャンスキー的主張を盲信することは、真の学問の敵であるセクト的な傾向に陥ることになる。

8 編の論文を通して更に教えられることは、ヴィノクールという具体を離れたより抽象的な事柄、学問に対する態度の問題である。クルイシンが指摘する学史研究上の注意点の他に、剽窃と権威付け引用の間

題があげられる。

パペルヌィは、ヴィノクールのマヤコフスキー論に触れ、彼の著作に依りながらヴィノクールの名をあげないマヤコフスキー研究も存在することを述べている。パペルヌィは具体的な書名を挙げておらず、筆者もそのようなことが実際あるのかを確かめることは出来ないが、事実であるならば忌まわしい。

またタタリノフは、ヴィノクールの論文が読まれていないのに引用だけはされることを指摘している。これは論文を権威づける為にヴィノクールの高名を利用しているということである。学会は天国ではなく、他の社会と同様善人も悪人も、強者も虎の威を借る弱者もいると、いってしまえばそれまでだが、筆者は何よりもまず自分自身の問題として、このような傾向に陥りがちであることを戒めたいと考えている。

2点補足しておきたい。1つは社会活動家としてのヴィノクールであり、2つはソシュール紹介者としてのヴィノクールである。

1990年刊行のヴィノクール著作集『フィロロギー研究 言語学と詩学 (Филологические исследования: Лингвистика и поэтика)』に於いては、ヴィノクールの約150の国際政治問題に関する論考(1921年から22年にリガの新聞『新しい道 (Новый путь)』とベルリンの新聞『新世界 (Новый мир)』に発表)があったことが語られている。20年代のあるインテリゲンチヤの活動として歴史的文化的な興味をひく事実である。これらの論考が如何なるものであるのか、またそれを扱った研究があるのか、現時点の筆者には不明であるが、今後の研究が待たれる分野であると確信する。今言えることは、ヴィノクールは象牙の塔の学者ではなく、己の意見を持ち社会活動も行っていたインテリゲンチヤであったということである。術語論への関心もその現れと言えよう。

ソシュールに関しては、1922年にパリで刊行された『一般言語学講義』によってヴィノクールがソシュールを知った可能性をクリンシンが述べている。ソシュールが如何に受容されたかはどの国にあっても常に言語学史の大きな問題であるはずなので、ヴィノクールとソシュールの問題も考察すべき事柄となる。この点でヴィノクールの業績はより評価されて良からう、と考える。

以上、モスクワ大学文学部図書館に於けるヴィノクール展示を概観した。紹介された各論文を批判し今後の研究へと続けていくことは本報告の目的ではない。ヴィノクールの研究が、論者達が主張するように今なおアクチュアリティがあるかどうか（それはヴィノクール論の存在自体が既に示していると筆者には思われるが、問題視しようと思えば出来る）、あるとしてどのようなものか、もそれぞれ個別の問題の中で考えることである。まずは、生身の人間として提出されたヴィノクールを、真のフィロロクとして師表として受け入れ、しかし、セクト的な崇拝に陥らず、学ぶべき点は学ぶことが必要であろう。そして、その学ぶべき点をあげれば、広い視野を持つこと、周囲との直接的な接触に我が身をさらし思索を続けること、己の変化を恐れないこと、学者とはまず人間であること、ということになる。

3：文献書誌

(1) から(4)はモスクワ大学文学部図書館展示にて紹介されていたもの。但し、区分けは筆者に依る。(5)はヴィノクール関連文献を(1)～(4)に基づき筆者が補ったもの。書誌に関して不明点もあり、また全ての文献を網羅している訳でもないが、今後の便宜のためあえて、記述に不統一を残したまま、挙げた（一部 1990 年の著作集掲載の書誌と重なる）。

(1) 一次資料 著作集

Винокур Г.О. Критика поэтического текста. —М.:Гос. академия худ. наук, —1927.—133с.

Винокур Г.О. Избранные работы по русскому языку.— М.:Государственное учебно-педагогическое издательство Министерства просвещения РСФСР, 1959.—492с.

Винокур Г.О. Филологические исследования. Лингвистика и поэтика.— М.:Наука, 1990.—452с.

Винокур Г.О. О языке художественной литературы./ Составитель Т.Г. Винокур.—М.: Высшая школа, 1991.—447с.

(2) 種類を異にする著作

Пушкинский дом: Статьи. Документы. Библиография.—Л.:Наука, 1982.—319с.

(3) 展示にて紹介された関連文献

Цейтлин Р.М. Лингвистические труды Г.О.Винокура и современное языкознание // ВЯ.—1986.—№6.—С.11-22.

Паперный З.С. Г.О. Винокур ученый и человек: Воспоминания не по случаю // Русская речь— 1987.—№6.—С.63-67.

Шапир М.И. «Граматики поэзии» и ее создатели (Теория «поэтического языка» у Г.О. Винокура и Р.О. Якобсона) // Известия АН СССР, Серия литературы и языка—1987.—Т.46, №3.—С.221-286.

Татаринов В.А. Терминологические возрения Г.О. Винокура и А.А. Реформатского// Филологические науки—1992.—№5-6.—С.63-75.

Шанский Н.М. Григорий Осипович Винокур (к 100-ю со дня рождения)//Русский язык в школе—1996.—№6.—С.97-101. 本誌の表紙はヴィノクルの写真。

Гиндин С.И., Иванова Е.А. Эпизод эпистолярной полемики Г.О.Винокура и Р.О.Якобсона (К 100-летию Г.О.Винокура) //Известия РАН Серия литературы и языка—1996.—Т.55, №6.— С.60—74.

Крысин Л.П. Вопросы социологии языка в работах Г.О. Винокура// Русский язык в школе—1997.—№2.—С.104-107.

Гиндин С.И. Собирая по крупицам...: Размышления между двумя годовщинами Г.О.Винокура//Литературное обозрение—1997.—№3.—С.57-59.

(4) 展示にて紹介された書誌

Советское литературоведение и критика. Теория литературы: Библиогр. ука. (1917-1967)—Ч.3.—М., 1989.—286с.—См.: Винокур Г.О. С.162, 263.

(5) (1)~(4)に基づく補足

Mazon A. Necrologie // RESI.—1947.—fs.1—4.—p.284.

Scharnhorst J. Sprachkultur in der sowjetischen Sprachwissenschaft der 20-er Jahre zu G.O. Vinokurs Buch «Культура языка» // ZPSK—1985.—3.—С. 283-296.

Бархударов С.Г. Григорий Осипович Винокур// Винокур Г.О. Избранные работы по русскому языку.—М., 1959.—С. 3-8.

Булахов М.Г. Восточнославянские языковеды.—Минск, 1977.—Т.2.—С. 122-129.

Винокур Г.О. Русский язык: Исторический очерк / Сост. и коммент. Е.А. Ивановой; Предисл. С.И. Гиндина // Русский язык: Еженед. прилож.—1996, ноябрь-дек.—№40-41, 43, 46, 48.

Гиндин С.И. Друзья в жизни — оппоненты в науке // Новое лит. обозрение.—1996.—№21.—С. 59-70.

Гиндин С.И. Филология говорит человеку о нем самом: Уроки Григория Винокура // Лит. газета.—1996.—№49(4 дек.)—С. 6.

Год Винокур //Русский язык: Еженед. прилож.—1996, август.—№30.—С. 1.

Городецкий Б.П. «Борис Годунов» А.С. Пушкина. Редакция текста и комментарии Г.О. Винокура...// Пушкинский временник.—Вып.4/5.—М.-Л., 1939.

Григорьев В.П. Предисловие // Винокур Г.О. О языке художественной литературы.—М., 1991.—С.5-7.

Звегинцев В.А. Г.О. Винокур //История языкознания XIX и XX веков в очерках и извлечениях.—Ч.II.—М., 1960.—С.227.

Из переписки Р.О. Якобсона с Н.В. и А.А. Реформатскими //Материалы Междунар. конгресса «100 лет Р.О. Якобсону».—М., 1996.—С. 28.

Одесский М.П. «...Краткий дискурс в нынешний день представим» : Г.О. Винокур о языковой политике петровской эпохи //Литературное обозрение—1997.—№3.—С. 78-80.

Панов М.В. Почему надо говорить и писать правильно? // Русский язык: Еженед. прилож.—1996, август.—№30.—С. 1.

Паперный З.С. Самый любимый преподаватель / Публ. Н.Н. Розановой // Русский язык: Еженед. прилож. к газете «Первое сентября».—1996, декабрь.— №45.—С. 1.

Переписка Р.О. Якобсона и Г.О. Винокура / Подг. текста и коммент. С.И. Гиндина и Е.А. Ивановой // Новое лит. обозрение.—1996.—№21.—С. 72-11.

Петерсон М.Н. Григорий Осипович Винокур // РЯШ.—1947.—№4.

Реформатская М.А. «Как в ненастные дни собирались они часто» : Г.О.Винокур в архиве Н.В. и А.А. Реформатских // Литературное обозрение—1997.—№3.—С. 59-64.

«Рома пишет из Праги...»: (Письмо Г.О. Винокура П.Г. Богатыреву) // Материалы Междунар. конгресса «100 лет Р.О. Якобсону».—М., 1996.—С. 19-23.

Русский язык: Энциклопедия—М., 1979.

Сюжет в кинематографе. По материалам Московского лингвистического кружка//Литературное обозрение—1997.—№3.—С. 81-84.

Цейтлин Р.М. Григорий Осипович Винокур (1896—1947).—М.: Изд-во МГУ, 1965.

Цейтлин Р.М. О Григории Осиповиче Винокуре — ученом и педагоге // Русский язык: Ежегод. прилож.—1996, декабрь.—№48.—С. 12.

Шапир М.И. Комментарии // Винокур Г.О. Филологические исследования: Лингвистика и поэтика.—М.: Наука, 1990.—С. 256-404.

Шапир М.И. Материалы по истории лингвистической поэтики в России (конец 1910-х — начало 1920-х годов) // Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз.—1991.—Т.50., №1.—С. 43—57.

Шмидт С.О. Г.О. Винокур и академическое издание пушкинского «Бориса Годунова»//Литературное обозрение—1997.—№3.—С. 65-77.

Энциклопедический словарь юного филолога—М., 1984.—С. 288-289.